

第29回国際標準化機構第190技術委員会総会 (ISO/TC 190 'Soil quality' and CEN/TC meetings) 参加報告

田本 修一*

1. はじめに

2014年10月20日から24日にかけてドイツ連邦共和国ベルリン市のドイツ規格協会(写真-1)において第29回国際標準化機構第190技術委員会総会(以下、ISO/TC 190)が開催されました。筆者は委員の一人として、ISO/TC190に参加する機会を得ましたので、概要を報告します。



写真-1 ドイツ規格協会(DIN)

の特性の測定と報告を含む地盤環境分野における地盤品質の標準化を目的として1985年に設置されました。日本からは、日本工業標準調査会が参加標準化団体として1952年から参加しています。現在、(社)地盤工学会がISO/TC190の国内委員会の運営を担っています。

総会には、フランス、イギリス、ドイツ、日本などの13カ国から総勢90名が参加しました。日本からは、国内委員会の筆者を含む委員13名が参加しました。ISO/TC190では、図-1に示す5つの分科会(SC 1、2、3、4、7)と各分科会の下に活動休止中のワーキンググループ(WG)を除き合計18のワーキンググループに分かれて会議が開催されました。次節では、これらの会議のうち筆者が参加した SC7/WG6 (溶出試験)の内容を紹介します。

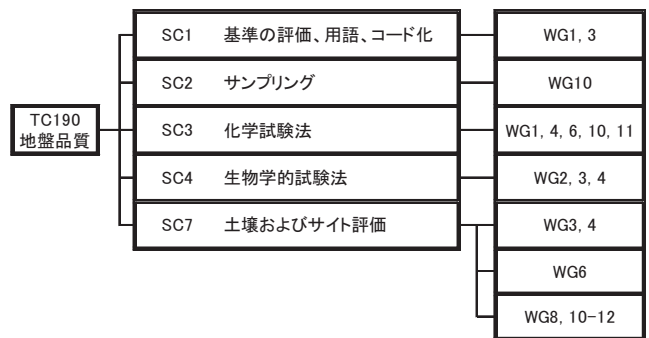


図-1 ISO/TC190の組織構成

2. ISO/TC 190の概要について

世界ではグローバル化が進む中、技術が高度化・多様化し、市場や消費者への混乱を防ぐため地盤環境の分野においても標準化が必要とされています。また、1995年のWTO/TBT協定(貿易の技術的障害に関する協定の第2条4項および附属書3)に基づき地盤品質においても国際標準規格(ISO)が存在する場合は、日本国内においても該当する国際規格とその関連部分を強制あるいは任意に国内規格の基礎として用いなければならなくなりました。

ISO/TC 190はISOの技術委員会であり、地盤環境に関連する分類、用語の定義、土のサンプリング、土

3. SC7/WG6の内容

SC7/WG6では、ドイツ、オランダ、フランス、韓国、日本から11名の委員が参加し、溶出試験の規格の審議を行いました。

まず、ISOが標準化されるまでの流れを図-2に示します。まず、各WGのプロジェクトリーダーが原案(NWIP)を作成し、賛成/反対投票と修正意見をWeb上で募ります。意見を受けてプロジェクトリーダーは修正案を作成し、各国から了承を得ます。毎年行われ

る総会や中間会議で、WD；Working draft、CD；Committee draft、DIS；Draft international standard、FDIS；Final DISと各段階を経てISOとして定められます。各段階で概ね3年を過ぎた場合は、取り下げ、延長、もしくは差し戻しを行います。また、ISO国際標準は、5年ごとに見直しが行われます。

今回、ドイツと日本から提案されたのは、技術仕様のISO/TS 21268-1～3 "Soil quality — Leaching procedures for subsequent chemical and ecotoxicological testing of soil and soil materials Part 1～3"（土ならびに土質材料の化学的・生態毒物学的試験のための溶出方法－その1～3）について、ISOにする提案が行われました。

NWIP (New Work Item Proposal)
⇒ WD (Working Draft)
⇒ CD (Committee Draft)
⇒ DIS (Draft International Standard)
⇒ FDIS (Final DIS)
⇒ ISO

図－2 ISOが標準化されるまでの流れ

このうち、ISO/TS 21268-1、2は振とうによるバッチ式溶出試験方法でドイツにより提案され、一方、

ISO/TS 21268-3は上向流カラム溶出試験方法で日本により提案されました。日本の提案内容は、現在、筆者が研究を進めている自然由来重金属類の溶出試験方法に関わるものです。WGでは、それぞれの規格を改定することが決定されました。その後、全体会議でも承認され、ISO/TS21268-3について日本がプロジェクトリーダーとなり、積極的にISO化を進めていくことになりました。

4. おわりに

ISO/TC190では、日本発のISO規格が提案され承認されました。規格承認後、JIS規格としても登録されることになり、自然由来重金属類の溶出試験方法の一つとして現場で活用されることとなります。今後は、日本が概ね3年以内に原案(NWIP)を作成しなければなりません。ISOとして承認されるまでには、かなりの年数を要することと予想されますが、筆者はその検討に参画していき、研究成果も反映させていきたいと考える所存です。

最後に、本総会に参加する機会をいただきました(社)地盤工学会TC190国内専門委員会の委員の皆様、並びにお世話になった関係各位には、ここに深く感謝の意を表します。



田本 修一*
TAMOTO Shuichi

寒地土木研究所
寒地基礎技術研究グループ
防災地質チーム
研究員